

Come si fa una tesi di laurea ム・エフ監修「教養諸学シリーズ」①

Umberto Eco

論文作法

◎調査・研究・執筆の技術と手順

ウンベルト・エコ 著 谷口 勇 訳



Umberto Eco

Come si fa una tesi di laurea

論文作法

◎調査・研究・執筆の技術と手順

ウンベルト・エコ 著

谷口 勇 訳

而立書房

〔訳者紹介〕

谷口 勇 (たにぐち いさむ)

1936 年 福井県生まれ

1963 年 東京大学大学院西洋古典学専攻修士課程修了

1970 年 京都大学大学院伊語伊文学専攻博士課程単位取得

1975 年 11 月～76 年 6 月 ローマ大学ロマンス語研究所に留学

1979 年 桃山学院大学教授

主著訳書 『ルネサンスの教育思想 (上)』 (共著)

『エズラ・パウンド研究』 (共著)

Ph. リヴィエール/L. ダンシャン『言語学と新しい教養』

E. H. トブリッゼ『ベネデット・クローチェの美学』

J. トラバント『記号論の基礎原理』

H. A. スリュサレヴァ『現代言語学とソシュール理論』

A. マルケーゼ『構造主義の方法と試行』

T. J. ゴートン『アラブとトルバドゥール』

Б. Я. シドファル『アンダルシア文学史』

T. ズビエルスキ『書物の記号論』

W. カイザー『文学作品の分析と解釈』 (上)

J. クリステヴァ『テキストとしての小説』

L. デ・クレシェンツォ『物語ギリシャ哲学史』

U. エコ『イタリア案内』

『『バラの名前』 解明シリーズ』 既刊 5 冊

M. ターラモ『「フーコーの振り子」 指針』

L. パンコルボ他『ウンベルト・エコ インタビュー集』 ほか多数

論文作法 ―調査・研究・執筆の技術と手順―

1991 年 2 月 25 日 第 1 刷発行

定 価 1957 円 (本体 1900 円)

著 者 ウンベルト・エコ

訳 者 谷口 勇

発行者 宮永 捷

発行所 有限会社而立書房

〒101 東京都千代田区猿樂町 2 丁目 4 番 2 号

振替・東京 9-174567 / 電話 03 (3291) 5589

FAX 03 (3292) 8782

印 刷 科学図書印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

© Isamu Taniguchi, 1991. Printed in Tokyo

ISBN 4-88059-145-9 C 1098 P1957E

新版まえがき

1. この新版は初版が出てから8年を閲^{くわ}している。当初は学生たちに同じ勧告を幾度も繰り返すのを避ける目的で書いたのだが、この本は相当広汎に流布するところとなった。ありがたいことに、同僚たちは今日でも本書を学生たちに勧めてくださっているし、また、おまけにひょっこり本書を見つけた留年生たちが私に手紙を寄せ、中身を繙いたおかげで論文を書き出したり、あるいは書き終えたりする力がやっと湧いてきたと記してくれている。わが国〔イタリア〕の学士の数を増やすのにはたして私が貢献したのかどうかは定かではないが、事態がこうなった以上は、私はその責任を引き受けねばなるまい。

私は執筆に際して、人文系学部、それも個人的経験に基づき、文・哲学部が目配りしたのだが、本書が万人に多少は役立つ結果となったのは、思うに、結局のところ本書が論文の内容について触れるよりも、作業に取りかかる心構えや、踏襲すべき妥当な方法について述べているからである。大学教育を受けていない人、もしくはまだ受けるに至っていない人や、さらには中・高校生でさえ、何かの研究とか報告書を用意しなければならなくなって、彼らにより本書が読まれるようになったのも、そういう理由からなのだ。

論文に対する必要条件を異にしている外国でも、本書は翻訳されるところとなった。もちろん、それぞれの国情に合わせていくらか調整されはしたが、しかし全体としては、本書の論旨は輸出されうるもののようと思われる。世界のいずこにおいても、立派な研究を行うためのルールは、複雑さのレヴェルに関係なく、要するに同じなのであり、こんなことは何ら驚くに及ばない。

本書を書いていた当時には、イタリアではまだ大学改革が行われていなかったから、序文では本書が学士論文（その当時まで了解されてきたような形態のもの）に役立つのみならず、博士論文として通用するよう

なものにとっても役立つかもしれない、と灰めかしておいたのだった。この見通しは間違っていなかったと信ずるし、今日では、本書を学士に対しても勧めたいと思う（もっとも、学士号を取得したような人なら、私が言わんとしているような事柄はもうとっくに体得してしまっていると望みたいが、はたしてどうだろうか）。

2. 初版の序文では、イタリアの大学が当面しているさまざまな難題からして、本書のような小冊子でも、自暴自棄になっている無数の学生に役立つだろうと述べておいた。今日、在庫部数をすべて製紙用の水槽に投げ込まねばならないとしたら、また、このマニュアルをまたしても再版する破目に立ち至らないとしたら、それこそどんなに幸いなことだろう。ところがなんたることか、私は当時に繰り広げた話をまたもやり直すことしかできないのである。〔以下、「初版序文」の1.～2. および5.～6. が再録されているが、重複を避けるため省略した。〕

6. 本書が出てから、とても奇妙なことが私にふりかかった。たとえば、時折、学生からこんな手紙を受け取ることがある——「かくかくの論題について論文を作成すべきでしょうか」（断っておくが、それらの論題群は極めて広大であり、そのいくつかに対しては、私はほとんど途方に暮れるばかりである）、「自分の作業が進捗できるように、どうか完全な文献目録を送ってくださいますか」。

こういう手紙の発信人が本書の意味を把握しなかったか、もしくは私を魔術師と思い違っていることは明らかだ。本書は独力で作業する仕方を教えようとしているのであって、どうすれば、かつどこに行けば、巷間にいわれているように、“すえ膳”が見つかるかを教えるのが目的ではない。

さらに、文献目録を私に要求してきた学生は、文献目録の作成が長期の仕事になることを了解しなかったのであり、仮に私に要求された文献目録のうちの一つだけを発送せねばならないとしても、私は数カ月間

——いやそれ以上もの期間にわたり——作業しなくてはならないであろう。これだけの時間を全部投入できたとしたら、誓っていうが、私ならきっと、もっとうまい時間の費やし方をするに違いない。

7. だが、私にふりかかったことでもっとも奇妙なのご紹介しておきたい。それは本書の中味に関係しているもので、具体的にはIV.2.4.「学問上の謙遜」と題した一節にかかわっている。この一節を読んでいただければ、私の示さんとしていたことは、立派なアイデアが大立者から生まれるとは限らない以上、いかなる〔小人物の〕貢献も軽視すべきではないという点にあることがお分かりになるであろう。しかも私は、自分が学士論文を作成中に実際に体験した話を記しておいたのである。すなわち、たまたま店先で見つけたのだが、ヴァレ神父とかいう人物によって1887年に書かれた、大して独創性もない小冊子を読んでいて、めんどろな難問を解いてくれる決定的なアイデアに遭遇したということがあったのである。

拙著が出版されてから、ベニアミーノ・プラチドが「レブブリカ」紙上(1997年9月22日付)でおもしろい書評を発表した。そのなかで彼はおおよそ次のようなことをいっていた。私が紹介した研究上の冒険は、ちょうど、(昔話のなかによくあるような、しかも、ウラジーミル・J・プロップによって理論化された話にも似て)ある人物が森の中で道に迷いながらも、ある地点で、贈与者に出くわし、“魔法のかぎ”(呪宝)を授かるという、昔話に出てくる推移にそっくりだ、と。

プラチドの解釈はそれほど奇抜だったわけではなく、現に研究というものは常に一種の冒険ではあるのだが、ただプラチドは、私が自分の作り話を語るためにヴァレ神父をでっち上げたかのような印象を与えてしまった。そこで、しばらくしてからプラチドに会ったとき、私は彼に向かってこう言ってやったのである。「あんたは誤解しているよ。ヴァレ神父は実在している、いや、実在したんだ。現に彼の本ならまだ家に置いてあるよ。それを繙いてから20年以上も経つが、今でも、あの着想

を見いだしたページのことや、余白に赤ペンで書き込んだ感嘆符のことは覚えているんだ。生々しい記憶として焼きついているからね。家にきてくれば、この名もないヴァレ神父の影の薄い本をお見せするよ」。

言うやいなや、われわれは一緒に私の家に赴き、ウイスキーを酌み交わしてから、やおら脚立に上り、忘れもしない、20年来寝かせておいた宿命的な例の本のある書架を手探りした。案の定、見つかったので、その本のちりを払い、ある種の感動をもって再び開けながら、例の宿命的なページを探して行くと、ほら、この通りあるではないか——余白にまさしく感嘆符のついたページが。

そのページをプラチドに見せてやり、ついで私にとって大きな助けとなった一節を読んで聞かせる。1回、2回と繰り返し読んでいて、啞然とした。ヴァレ神父は、私がこれまで彼のおかげだと思ってきたような着想を少しも表明してはいなかったのだ。つまり、判断力の理論と美の理論との間に例の結びつき（かつては私にはあんなにも卓抜なものと思われた）を少しも設定してはいなかったのだ。

ヴァレを読んでいて（彼はほんとうはほかのことを話題にしていたのだが）、彼の述べていたことから、摩訶不思議ながら、刺激を受けて、あの着想が私の脳裡にひょっこり思い浮かんだのであり、しかも、私がアンダーラインを引いていた本文のなかにまるで沈湎したかのように一体化してしまい、あの着想をヴァレのせいにしてしまったのだ。あまつさえ20年以上もの間、私はこの老神父に対し、ほんとうは私に何も授けてくれたわけではないのに、感謝してきたという次第。“魔法のかぎ”は、実は私が独力で考案したものだったのだ。

だが、ほんとうにそうなのだろうか。あの着想を生み出した功労はほんとうに私のものなのだろうか。仮にヴァレを読まなかったとしたら、着想も思い浮かばなかっただろう。彼はあの着想の生みの親ではなかったにせよ、言わば産科医だったのだ。彼は私に何も与えてくれたわけではないが、私の心を鍛えてくれたのであり、ある点では私の思索にはずみを授けてくれたことになる。こんなことはおそらく師匠に（さえ）求

むべくもないのではなからうか。アイデアが思い浮かぶように、われわれをせき立てるなどということは。

いろいろと再考してみて、私に気づいたことがある。それは、私が読書の過程で、ほんとうは他人がいろいろなアイデアを研究するように私に仕向けただけだったのに、それらのアイデアを往々にして他人のものと考えてきたという点である。あるいはまた、あるアイデアが自分のものだと確信していたのに、ずっと以前に読んだ何らかの本を再読していて、そのアイデア、もしくはその中核はある作者のおかげで私に思い浮かんだのだということを間々発見したりした。

私はいまや納得がいったのだ。自分がヴァレだけに（不当にも）信用貸しをして〔＝ヴァレだけに名を成さしめ〕、ほかの人たちに対してはどれほど多くの借金の支払いを〔＝恩義に謝意を表するのを〕忘れてきたか……ということ。こういう話をしても、拙著のほかの論旨と噛み合わないわけではないと思うし、この話の意味は、研究という冒険は神秘的な、熱中させるものであり、多くの驚異にみちているということなのだ。そこには一個人が介入するのではなく、一つの文化全体が介入するのであり、また時には、アイデアがひとりでに旅し、移動し、消え失せ、再び姿を現すこともある。たとえてみれば、誰かが語り直すにつれてとみに面白くなる笑い話と同じなのだ。

それだから、やはりヴァレ神父に感謝の念を保ち続けるべきだと心に決めた次第であり、それも彼がまさしく“魔法使い的な贈与者”だったからである。この故にこそ——そして読者諸賢のうちにはもうきっとお気づきの方もおられるだろうが——私は自分の長篇小説『バラの名前』の主要人物として彼を導入し、序文の2行目に彼を引用する際に、今度は、失われた写本の神秘極まる魔法使い的な贈与者として、書物どうしが語り合う場たる図書館のシンボルとして描いたのである。

この話の結論が^{モラル}どうということになるのかは定かでないが、少なくとも一つ、しかも極めて美しいモラルがあることは承知している。どうか読者諸賢におかれては、銘々の人生の過程において数多くのヴァレ神父を

x 新版まえがき

見いだしていただきたい。また私自身としては、どなたかのヴァレ神父になりたいものと願う次第である。

1985年2月，ミラノにて

ウンベルト・エコ

初版まえがき

1. 昔は大学がエリートの大学だった。大学に通うのは学士の子息だけで、稀な例外を除き、学生は必要なだけ四六時中、勉学に打ち込めた。大学は静かに没頭するところと考えられていた。たとえば一時を勉学に、一時を遍歴書生の“健全な”気晴らしか、あるいは代表的な学生団体の諸活動に割く、といったように。

授業は権威のある講演だったし、さらにもっと興味を抱く学生は、教授や助手と一緒に引きこもって、せいぜい10名ないし15名のゼミナールでゆっくり話し合うのだった。

今日でも、北米の多くの大学では、一課程の学生数が10名ないし20名を超えることはない（学生は高い授業料を払って、論議したいだけ教師を“使う”権利を手中にする）。オックスフォードのような大学には、チューターという教師がいて、ごく少数の学生集団の研究題目に専心し（年に1、2名の学生だけにかかりきるようなこともありうる）、毎日、彼らの勉強を指導するのである。

イタリアの状況がこのようであるとしたら、本書を著す必要はないであろう。もっとも、本書の助言のいくつかは、今しがた素描した“理想的な”学生にとっても役立つかもしれないけれど。

だが、イタリアの大学は今や大衆の大学となり果てている。あらゆるタイプの中学・高校教育を受けた、あらゆる階級の学生が大学に押し寄せる。学生によっては、ギリシャ語はおろか、ラテン語すら修めたことのない、工業高校を卒業しながら、哲学とか古典文献学を専攻する者さえいる。確かに、多くの活動分野にとってラテン語はほとんど役立たない言語だが、哲学や文学を研究する者にはたいそう有益なのである。

大勢の学生が殺到する課程もある。そのうち教師が顔を覚えるのは比較的によく出席する30名くらいが関の山で、協力者（奨学生、契約雇用者、演習助手）に助けてもらっても、いくらか熱心に勉強させうるのは

100名程度である。こういう学生の多くは良家に生まれ、活発な文化的環境のなかで育った裕福な者たちであって、勉学の旅をすることができし、芸術や演劇のフェスティヴァルに参加したり、外国旅行をしたりする。しかしまた、別の学生たちもいる。

彼らはもしかすると、文具書籍店しかないような、人口1万の役場で働いて日を過ごすかもしれない。学生によっては、大学に失望して、政治活動を選び、別種の訓練に没頭しながらも、遅かれ早かれ卒業論文を書き上げざるを得なくなる者もいる。経済的に窮した学生は、試験を選ぶに当たって、指定された諸種の教科書の値段を勘案しつつ、「この試験はしかじかの金額がかかる」と考えて、相補的な2科目のうちから安い方を選ぶ。時たま授業に出席しても、超満員の教室に席を見つけることもままならず、果ては、教員と話をしたくても、30名もの列の後ろに並ばねばならず、宿に泊まれないので汽車に乗って帰らなければならない学生がいる。図書館での本の探し方や、どういう図書館があるかについて説明を受けたこともない学生は、自分の町の図書館で本が閲覧できることも、どうしたら貸出証を入手できるかも知らないことが稀ではない。

本書のアドヴァイスはとりわけ、こういう学生たちを対象にしている。これから大学に入るつもりでおり、卒業論文なる錬金術はどんな働きをするのかを知りたがっている高等学校の生徒にとっても役に立つはずである。

本書がこういう人たちに助言しようとしているのは、少なくとも次の2点である。

——最近のものであれ過去のものであれ、さまざまな差別に起因する困難な状況に置かれていながらも、堂々たる卒業論文をつくれるようにすること。

——（たとえそれまでの大学在学期間が幻滅させるような、すなわち、期待を裏切るものであったにしても）卒業論文の機会を利用して、諸種の基礎知識の採集としての勉学ではなくて、ある経験の批判的練り

上げ——つまり、諸問題の所在を突きとめ、それらに方法をもって対処し、それらのある種の伝達技術に則して説明するための能力（将来の生活にとって有用な能力）の獲得としての勉学がもつ、肯定的・前進的意味を取り戻すことができるようにすること。

2. 上述のことから明らかなように、本書は「学問的研究のやり方」を説明しようとするものでもないし、研究の価値に関して理論的・批判的議論を行うものでもない。それはただ、一定の書式に則り、清書された一定枚数から成る物体を卒業論文判定委員会へ提出するまでにはいかなる手順を踏むべきかを、あれこれと考察しただけのものにすぎない。そのような手順を踏めば、卒業しようとしている学科といくぶんなりともかわりを持てるかもしれないし、指導教員をあきれ返らせるといった嘆かわしい状況も回避できよう。

本書が卒業論文で何を書くべきかをいえないことは当然である。それは諸君の問題なのだから。本書が諸君にいええることは、次の諸点なのだ。(1) 卒業論文をどう解するか、(2) 主題をどのように選び、作業時間をどう調整すべきか、(3) 文献調査をどのようにやり抜くか、(4) 見つけた資料をどう組織するか、(5) 練り上げたものを具体的にどう整理するか。しかも避けがたいことなのだが、この最後の仕事こそが、たとえ一見して些細なことに思えようとも、最も精密な部分をなしている。現に、かなり厳格ないろいろの決まりは、この部分のためにだけ存在するのである。

3. 本書で言及する卒業論文とは、人文科学系の諸学部でなされるもののことである。筆者の経験は文学・哲学の学部と結びついているので、当然のことながら、大半の実例はこれら学部で研究されるテーマに関するものとなろう。しかしながら、本書にこういう限界を課しているとはいえ、筆者がお勧めする基準は、政治学、教育学、法律学の正規の卒業論文にも十分に合致するものである。歴史的な、もしくは一般理論的な

(しかも実験的・応用的ではない) テーマを取り上げるのであれば、本書が示したモデルは、建築学、経済学、商学や、若干の自然科学系学部でも役立つはずだ。だが、あまり過度の信頼はしないでいただきたい。

4. 本書が印刷中にも、イタリアでは大学改革のことが論議されている。やはり話題は二、三の卒業レベルについてである。

この改革がはたして、卒業論文の概念すらをも急激に変えることになるのかどうかは疑問の余地を残している。

それはさて置き、卒業レベルをいくつか設定し、外国では押し並べで行われているモデルに追随するようになれば、状況は第1章(I.1)で筆者が述べることに変わりがなくなろう。つまり、学士(ないしは第一レベル)の論文と、博士(ないし第二レベル)の論文とが設定されることになる。

本書で筆者が行う助言は両方の論文に当てはまるし、もしもそれぞれの論文で相違があるような場合には、それをはっきりと説明することにした。

それだから、以下の本文において述べることは、改革の展望から、とりわけ、ありうる改革の実行に向けての長い過渡期の展望からも、妥当なものだと信じている。

5. チューザレ・セグレはタイプ打ち原稿を読んで、いろいろと忠告を与えてくれた。その多くを活用したが、また私の立場を固執した場合もあるので、最終結果の責任は彼にはない。もとより、彼に対しては衷心より感謝している。

6. 最後にお断りを一言。以下の論述はいうまでもなく、学生や女学生、教師や女教師を対象にしている。いずれにせよ、イタリア語では両性を示すことのできる中立的表現を欠いているので(アメリカ人はだんだんと“person”を用い始めているが、“la persona studente”とか、

目 次

ii 目次

新版まえがき	v
初版まえがき	xi

第Ⅰ章 卒業（博士）論文とは何か。何に役立つか

I. 1. なぜ論文を作成しなければならないのか。論文とはい たい何なのか	3
I. 2. 本書に関心のある向きへ	7
I. 3. 学位取得後も論文はどのように役立つか	8
I. 4. 四つの明白な心得	10

第Ⅱ章 テーマの選び方

II. 1. モノグラフ的論文か、パノラマ的論文か	12
II. 2. 歴史的論文か、理論的論文か	18
II. 3. 古典的テーマか、現代的テーマか	21
II. 4. 論文作成にはどれくらい時間がかかるか	23
II. 5. 外国語を知る必要があるか	28
II. 6. 科学的論文か、政治的論文か	34
II. 6. 1. 科学性とは何か	34
II. 6. 2. 歴史的－理論的テーマか“ホットな”経験か	41
II. 6. 3. 今日のテーマを科学的テーマに変えるには	45
II. 7. 指導教員に利用されるのを回避するには	54

第Ⅲ章 資料調査

III. 1. 典拠への接近可能性	57
III. 1. 1. 学問的作業の典拠はいかなるものか	57
III. 1. 2. 直接的典拠と間接的典拠	63
III. 2. 文献調査	68
III. 2. 1. 図書館の活用法	68
III. 2. 2. 書誌への取り組み方——カード目録	73

Ⅲ.2.3. 文献の引用	78
表1 文献引用の諸規則の要約	98
表2 文献カードの実例	100
Ⅲ.2.4. アレッサンドリア図書館——一つの体験	102
表3 3点の参考書を調べて判明した、イタリア・バロック に関する一般書	115
表4 3点の参考書を調べて判明した17世紀イタリア評論 家たちに関する個別著書	116
Ⅲ.2.5. 各種書物は読むべきか？ またどういう順序で？	127

第Ⅳ章 作業計画とカード整理

Ⅳ.1. 作業仮説としての目次	131
Ⅳ.2. カードとメモ	141
Ⅳ.2.1. カードの種類——何に役立つか	141
表5 引用のカード	146
表6 連結のカード	147
Ⅳ.2.2. 一次資料のカード	150
Ⅳ.2.3. 読書カード	153
表7-14 読書カード	156
Ⅳ.2.4. 学問上の謙遜	168

第Ⅴ章 原稿作成

Ⅴ.1. 誰に語りかけるか	172
Ⅴ.2. どのように語りかけるか	175
Ⅴ.3. 引用の仕方	187
Ⅴ.3.1. いつ、いかに引用するか——十則	187
表15 同一テキストを連続して分析する場合の実例	198
Ⅴ.3.2. 引用，敷衍説明，剽窃	199
Ⅴ.4. 脚注のつけ方	202
Ⅴ.4.1. 注は何に役立つか	202

V. 4.2. 引用 - 注の方式	205
表 16 引用 - 注の方式による 1 ページの実例	207
表 17 当核の標準的書誌の実例	208
V. 4.3. 著者 - 刊行年の方式	209
表 18 表 16 と同じページを〈著者 - 刊行年〉方式で書き改めた もの	214
表 19 〈著者 - 刊行年〉方式による当該書誌の実例	215
V. 5. 注意事項, わな, しきたり	216
V. 6. 学問上の矜持	221

第VI章 決定稿の作成

VI. 1. 書法基準	225
VI. 1.1. 余白とスペース	225
VI. 1.2. 下線〔傍点〕強調と大文字	226
VI. 1.3. 節	228
VI. 1.4. 引用符およびその他の符号	230
VI. 1.5. 読み分け符号とローマ字化	233
表 20 非ラテン系アルファベットのローマナイズの仕方	234
VI. 1.6. 句読法, アクセント, 略語	237
表 21 注や本文において用いられるごく普通の略語一覧	239
VI. 1.7. いくつかの助言——順不同	241
VI. 2. 末尾の書誌	246
VI. 3. 付録	250
VI. 4. 目次	252
表 22 目次見本	253

第VII章 むすび

文献抄録	260
訳者あとがき	262